

『テキストの生理学』

第1部 バルザック篇

「輝く星座のごとく」：バルザックにおける人物の集団化の一例	岩村和泉
バルザック『魔王の喜劇』における風刺の手法	大下祥枝
ロール・シュルヴィルは何故書き始めたのか	大竹仁子
『女性研究』における語り手の問題	奥田恭士
バルザックにおけるテキスト内テキスト	鎌田隆行
—『あら皮』と『幻滅』第二部を中心に—	
バルザック、わが旅	九野民也
『人間喜劇』における画家たちの世界—編愛と不在の軌跡	澤田 肇
バルザックと摂取吸収作用（アンテュスユセプション）について	中堂恒朗
結論の出ない『人間喜劇』	中村加津
『オノリーヌ』における謎の読解と共有の幻想	博多かおる
『人間喜劇』における絵画コレクションの命運	松村博史
—『ピエール・グラスー』を中心に—	
隠喩としての図像—『人間喜劇』におけるポルトレー	村田京子

第2部 理論・応用篇

過去形に対応する現在形	井元秀剛
現代フランス語における名詞から前置詞への文法化	春木仁孝
<i>Comptes amoureux</i> 研究（5）	鍛冶義弘
『悲愴曲』「王侯」におけるアンリ3世	濱田 明
パスカルの計算機と負数	永瀬春男
女性の身体と社会	高岡尚子
—ジョルジュ・サンドの初期作品における〈産む女〉、〈産まない女〉—	
聖アントニウスの誘惑をめぐって	金崎春幸
リラダンにおけるタナトス—『未来のイヴ』と『アクセル』—	小西博子
ロートレアモン＝デュ貸すによる「偽りのジャンル」小説の活用法	寺本成彦
—『マルドロールの歌』「第6歌」における“反＝小説”の生成—	
アンドレ・ジッドの『女の学校』	小坂美樹
—日記体小説における作者と「編集者」について—	
マルセル・ブルーストと政教分離法	長谷川富子
—「コンブレー」の二つの教会をめぐって—	
『失われた時を求めて』における「夢想」の町の機能	川本真也
—バルベックの海の嵐のモチーフをめぐって—	

ヒツジは実在するか？—『星の王子さま』という儚い虚構—	藤田義孝
「誘惑」をめぐる—アンドレ・マルロー『西洋の誘惑』についての小論—	上江州律子
追放から再生へ—カミュ「生い出ずる石」における泉のイメージを介して—	安藤麻貴

第3部 比較篇

芥川龍之介におけるボードレールの受容の展開	北村 卓
永井荷風に見るギ・ド・モーパッサン	足立和彦
『方丈記』から半自伝的散文作品へ	アニエス・ディソン
—日本を巡るジャック・ルーボー—	
パスカルとロベルヴアルにおける空気の弾性	武田裕紀
クロード・フォーリエルとスタンダールにおけるアラビア	粕谷裕己
サント=ブーヴとヴィオレ=ル=デュック	岩根 久
ネルヴァルとピエール・ジュール・エツツェル	小林宣之
フォーレの歌曲の“文学性”— <i>Tristesse, Lydia, Clair de Lune</i> —	中村順子
アンドレ・ジッドと美術—モーリス・ドニをめぐる—	立川信子
メルロ=ポンティとヴァレリー	井上直子
感覚の詩学—プルーストとルコント・ド・リール	加藤靖恵
パスカル・キニャールと「自然の叫び」	小川美登理
—音楽と文学の結び目について—	
20世紀フランス文学における旅とエクリチュール	和田章男
—「旅行記」の終焉と「旅行小説」の隆盛—	
深い感謝をこめて	柏木隆雄
柏木隆雄先生略歴	
柏木隆雄先生研究業績目録	